

人権ほつと三年四月号

「人権問題の多面性」

大阪教育大学教授

堀 薫夫

気がつけば私は二〇一〇年から、長期間にわたって、このコラムを担当してきた。ここでこれまでどのようなテーマを取り上げたかを振り返ってみたい。当初、女性・障害者・同和問題などは他のそれらを専門とされる方々が執筆されるということだったので、それら以外のテーマを、主にメディア論を中心に考えてきた。

過去に私が人権問題として取り上げたテーマは以下のものなどである。メディアのなかの人権問題、年齢問題、自然権、正常と異常、屠場問題、ことばについて、シニア・ストーリー、人権問題の語り方（ビッグ・イシューについて）、ホームレス問題、他者を見るように自分を見ること、ヘイトスピーチ、高齢者虐待、放送禁止歌、シリア難民、直観力、パワハラ問題、図書館でのクレーマー問題、

セクハラ問題、エクスカベーター、ハンセン病、死者の人権、中高年ひきこもり問題、そして最も最近ではコロナ禍における人権問題である。メディアで扱われた作品からも人権問題を考えた（この世界の片隅に、ボヘミアン・ラプソディ、ワンピース、妖怪ウォッチ、ダーリンは七〇歳、春にして君を離れ）。

ここからもうかがえるように、人権問題とはフィルターのようなものである。日常生活に潜む何気ない出来事の背後にも人権問題は潜むのである。「少し変だぞ」と思えたときに、人権問題が頭をもたげてくるのかもしれない。

長年執筆してきて感じたことは、政治的・国際的な摩擦にどこまで踏み込んでいいのかという点であった。香港問題、ウイグル問題、ロヒンギャ問題、アイヌ問題。自身の政治的立場性とその立場性をこえて潜む人権問題。このコラムが、人びとが依拠する足場を疑い、そして学ぶきっかけになればと思っている。